POLE

第 116 号
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」
2025.9.1

10/13 (月・祝) 中島公園内の豊平館で 定例総会と午後のポエジア を開催します！

写真は昨年の懇親会(10 月)&午後のポエジア(8 月)から

今年も豊平館の素敵な空間で、定例総会と懇親会兼朗読会「午後のポエジア」を開催します。
会員及びご縁のある皆様と共に、ポーランド文化に関わる交流の楽しいひとときになれば幸いです。

◆ 第 39 回 定例総会　1F 下の広間

※本会会員向け、ご出欠は同封のハガキで　〆切: 10 月 6 日(月)

15：30～16：30　総会
16：30～17：00　休憩・館内見学

※入館チケットは当会が用意します
※17：00 以前の入館/見学は￥300 自己負担となります

◆ 懇親会兼朗読会(第 14 回)「午後のポエジア」　2F 広間

※入場無料、ドリンク・軽食付 (持ち込み可)
※会員以外の方もお誘い合わせてご参加ください

17：00　開場
17：30　写真撮影
演奏 高橋可奈子（メゾソプラノ）
朗読会「午後のポエジア」

※17：00 以降は入館無料
※写真は本誌や HP, FB で利用します

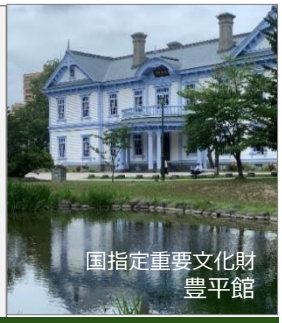
助成 ポーランド広報文化センター INSTYTUT POLSKI TOKIO

「午後のポエジア」朗読者を募集します
テーマ自由、朗読時間 5 分前後。朗読のほか、歌、踊り、演奏、映像、
テーマトークなども歓迎。お問合せは 熊谷敬子 電話 080-4045-1461 へ

20：00　終了予定

2025.10.13(月・祝)
豊平館にて
(中央区中島公園 1-20)

◇定例総会 15：30～
◇懇親・朗読会 17：30～



お問合せ・予約先：080-4071-0956（安藤）hokkaidopolandca@gmail.com

第 14 回 朗読会

午後のポエジア

助成 ポーランド広報文化センター INSTYTUT POLSKI TOKIO

プログラム

2025 年 10 月 13 日（月・祝日）（開場 17 時）17 時 30 分～　豊平館　2 階　広間

集合写真撮影（17 時 30 分）

懇親会（17 時 45 分ころ～）　司会　熊谷　敬子 / ジェプカ・ラファウ

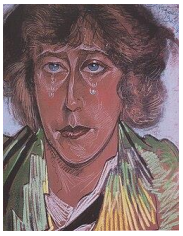
音楽鑑賞　声楽　高橋　可奈子（メゾソプラノ）伴奏　坂田　朋優（ピアノ）

1. 初恋　石川啄木　作詞　越谷達之助　作曲
2. 平城山　北見志保子　作詞　平井康三郎　作曲
3. 恋歌から　カルウォーヴィチ　曲　ヴァシニェフスキ　詞
4. 暗く穏やかな海の上で　カルウォーヴィチ　曲　テトマイェル　詞
5. 願い　ショパン　曲　ヴィトヴィツキ　詞

会食　ドリンク・軽食付（持ち込み歓迎：アルコールも可。ただしワイン等あまり度の強くないものを推奨）

「午後のポエジア」（第 117 回例会）（18 時 30 分ころ～）

1. 会長挨拶　安藤　厚
2. 菅原　未榮　自作詩「追悼　新川和江さん」
3. シンボルスカ最後の詩集から「瞬間 Chwila」朗読と解説：池田　光良（日本語）/ Renata Szarek　シャレック・レナタ（ポーランド語）
4. 風　野中　更科源蔵「国境」
5. ムラサキ　紫音　哲学者花崎皋平（小樽在住）著「天と地と人と」より
6. 小笠原　正明　宮沢賢治作「永訣の朝」より
7. Maria Pawlikowska-Jasnorzewska　マリア・パヴリコフスカ=ヤスノジェフスカ　=右画像=　作



「Róża バラ」朗読：Remiria Sato　佐藤レミリア
「Być kwiatem 花となって」朗読：Estera Sato　佐藤エステラ
「Miłość あい」朗読: Miriam Sato　佐藤ミリアム / Sylwia Olejarz　オレーヤージュ・シルヴィア

8. Antoni Słonimski　アントーニ・スウォニムスキ　=右画像=　作「Żal あわれ」

朗読：村田譲（日本語）/ Rafal Rzepka　ジェプカ・ラファウ（ポーランド語）
9. 村田譲　自作詩「駅名標」
10. Barbara Kazui　数井バルバラ　ポーランドの歌
    ① Czesław Niemen　チェスワフ・ニェメン「Sen o Warszawie ワルシャワの夢」
    ② Wilki ヴィルキ「Eli Lama Sabahtani エリ、ラマ、サバクタニ」（わが神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか）
11. ポーランドクイズ　出題者　Rafal Rzepka　ジェプカ・ラファウ / Renata Szarek　シャレック・レナタ
12. 終わりの言葉　風　野中（新会員）

終演　20 時 30 分ころ

2025 年はパヴリコフスカ没後 80 年、スウォニムスキ生誕 130 年に当たり、「マリア・パヴリコフスカ=ヤスノジェフスカの年」および「アントーニ・スウォニムスキの年」とされています。

Maria Pawlikowska-Jasnorzewska
マリア・パヴリコフスカ=ヤスノジェフスカ

Róża

W tym parku pobladłym bez śmiechów
przy róży rozkwitłej stoję.
Otośmy jedynymi świadkami pilności
ja jej a ona mojej.

バラ

笑いのない、色あせたこの公園で
咲きほこるバラのそばに私は立つ。
ここにいるのは勤勉さの証人ただ二人、
私はバラの、バラは私の。

Być kwiatem

Rozkwitają. Milczą pośród liści.
W kij związane lub pną się na kratę...
Dekoracje? Jeńcy? Statyści?
Łatwo chwalić kwiaty,
Lecz być kwiatem?...

花となって

花はさく。葉のあいだで静かに。
枝にからんだり、格子垣にのぼったり…
お飾り? とらわれ人? それとも付け足し?
花をほめるのはたやすい。
でも、花となって?…

Miłość

Nie widziałam cię już od miesiąca.
I nic. Jestem może bledsza,
trochę śpiąca, trochę bardziej milcząca,
lecz można żyć bez powietrza!

愛

もう一月（ひとつき）もあなたに会ってない。
でも大丈夫。私は、きっと、青ざめて、
ちょっと眠たげで、ちょっと無口になったけど、
でも、空気がなくたって、生きていけるわ！

（Rafal Rzepka/安藤厚訳）

マリア・パヴリコフスカ=ヤスノジェフスカ（旧姓コサック、1891-1945）は、ポーランドの詩人、劇作家。クラクフに生まれ、祖父ユリウシュと父ヴォイチェフは歴史画や馬を描いて有名な画家、妹マグダレーナは人気の風刺作家だった。

仏、英、独語に堪能で、若い頃から絵画と詩作に熱中した。最初の結婚の破綻の後、ヤン・パヴリコフスキと結婚、詩や文学への共通の関心と相互の愛に基づく二人の情熱的な関係は彼女にとって尽きることのない詩的インスピレーションの源だったが、この結婚も破綻した。

その後、ワルシャワを拠点とする詩人グループ「スカマンデル」と交流を深め、戦間期に 12 冊の詩集を出版し、当時最も革新的な詩人の一人として知られ「ポーランドのサッポー」「抒情詩の女王」と呼ばれた。

劇作家としては、1924 年にワルシャワで最初の喜劇を上演、1939 年までに 15 本の戯曲を執筆し中絶、不倫、近親相姦などタブーのテーマを扱ってスキャンダルを巻き起こした。彼女は母性を互いの情熱を終わらせる苦しい義務と捉え、女性の選択権を擁護した。批評家たちは彼女をモリエール、オスカー・ワイルド、ジョージ・バーナード・ショー、ヴィトカツィらと比較した。

1939 年、第二次世界大戦勃発後、3 番目の夫ステファン・ヤスノジェフスキと共に英国へ渡った。骨肉腫により 1945 年 7 月マンチェスターで亡くなった。

アントーニ・スウォニムスキ（1895-1976）はポーランドの詩人、画家、ジャーナリスト、劇作家、散文作家。1956-59 年の「ポーランドの雪解け」期にポーランド作家連盟会長を務め、社会正義への献身で知られた。

スウォニムスキは、科学に重点を置いた最初のヘブライ語週刊誌「ハ・ツェフィラ」の創刊者、ハイイム・セリグ・スウォニムスキの孫で、眼科医だった父はカトリックの女性と結婚して改宗した。スウォニムスキはワルシャワで生まれキリスト教徒として育てられた。ワルシャワ美術アカデミーで学び、1919 年、ユリアン・トゥヴィム、ヤロスワフ・イヴァシュキェヴィチと共に、実験詩人グループ「スカマンデル」を設立した。

戦時中フランス、イギリスに亡命したが、1951 年に帰国し大衆雑誌『Nowa Kultura 新文化』(1950-62)『Szpilki ハイヒール』(1953-73)『Przegląd Kulturalny 文化評論』(1964) などの寄稿者として活躍した。

彼は活動的な反スターリン主義者で、自由化の支持者だった。1964 年には文化の自由に関するユゼフ・チランキェヴィチ首相宛ての「34 人の書簡」の筆頭著者となった。

1976 年 7 月、ワルシャワで自動車事故により亡くなった。